

野球（スポーツ）の教育力

Educative effect through Baseball (Sport)

大西昌美

Masami ONISHI

キーワード：野球の教育力、私のスポーツ史、教員・指導者として、先達のスポーツ指導・教育

I. はじめに

ものごころついた幼い頃より外で遊ぶことが大好きで、学齢期には遊びに加え、スポーツが好きな児童であった。このスポーツ好きは中学、高校の生徒の時期に続き、大学は体育学科に進学した。卒業以降は初期に幼児体育教育を経験したが、その後、長期間に亘り高校の保健体育教員、兼野球部コーチ、監督を務めながら青年の教育に従事してきた。以後、大学職員として野球部監督を経験し、平成20年から北翔大学生涯スポーツ学部教員、兼野球部監督として勤務している。

以上、古くからスポーツに携わってきたが、自己の体験を可能な限り振り返りながら、スポーツの有する教育的意義について考えてみたいと思う。Ⅱにおいて自己のスポーツ史として先ず幼少期、小学校、中学校、高等学校、大学の各時期を振り返り、次にⅢにおいて卒業後の教員、指導者としての時期について省みたいと思う。Ⅳにおいて我が国におけるスポーツの指導者として先達の方々のスポーツ教育論を振り返り、Ⅴにおいて、私の思うスポーツ教育論を述べてみたいと思う。

Ⅱ. 私の運動・スポーツ史から

1957年2月28日 東京都狛江市にて2人姉弟の長男として生まれる。

1. 《幼少期》

(幼稚園～小学校2年生)の狛江市は(当時は北多摩郡狛江町)の自然環境他。東京都とはいえ、当時の狛江

は田畑に囲まれた田園地帯であった。日活映画の照明技師として働いていた父は、休みも不規則であり家族一緒に出かけることもなかった。しかし、会社の野球部に所属していた父が後楽園球場(現東京ドーム)で試合を行い観戦に出かけたことを鮮明に覚えている。当時は、「巨人・大鵬(横綱)・卵焼き」といった、子供達の大好きな物の標語のようなものがあつた。当時のプロ野球界は王、長島、広岡などが所属していた東京読売巨人軍が圧倒的に強く、子供達は皆YGマークのジャイアンツの帽子をかぶって走り回っていた。その雲の上のような存在の選手達が活躍していた後楽園球場のマウンドに立ち、投げていた父の姿を見て大きな影響を受けたのが最初の大きな出来事であった。(4歳ではじめてのユニフォームを買ってもらう。)

主な遊び：近所の沼や池、田んぼでどじょう、かえる、ふな、ザリガニ捕り。多摩川での魚釣り、いかだを作って川下り、木登り、崖登り、朝から暗くなるまで野山を走り回っていた。

スポーツ・他文化

- ・ゴムボールと木の枝を使った三角ベース野球(基本的ルールを覚える)
- ・近所の大きな会社の周りを囲んでいた塀(高さ2メートル幅10センチ程)の上を走る。(平衡感覚のトレーニング)
- ・缶けり(状況判断・瞬発力強化)
- ・川や田んぼにいる、かえるに石を投げる(巧緻性・コントロール強化)
- ・川面に石を投げ水切り遊び(肘・手首を連動させるス

ナップスローの練習)

- ・壁当てキャッチ，屋根にボールを投げ捕球する（投・捕練習）
- ・犬・猫・金魚・鳥（ハト）の飼育（生命について）
- ・メンコ・釘刺し・ビー玉・コマ回し（巧緻性）

主な怪我や出来事

擦り傷，切り傷が絶えなかった。（赤チンは必需品）

2. 《小学校3年生～6年生》

次第に人口が増加し，狛江町から狛江市となる。しかし，まだ自然があちらこちらに残っており遊び場所に不自由することはなかった。1964年（昭和39年）10月に東京オリンピックが開催されたが，それに合わせて多くの主要道路が舗装され，整備されていった。女子バレーボール，マラソン，体操競技，重量挙げ等で日本選手がメダルを獲得したことを鮮明に覚えている。

新任のスポーツウーマン先生が担任になり，体育の授業は勿論のこと，放課後，毎日のように指導してくれたおかげで「スポーツ大好き少年」となる。

主な遊び：虫取り，長馬乗り，手つなぎ鬼，縄跳び，ブランコ跳び

スポーツ・他文化：野球，鉄棒，スケート，サッカー，水泳，ドッジボール

体操クラブに入り，毎週1回，中学校の体育館で指導を受ける。鉄棒は高鉄棒を使用し，逆上がり，蹴上がり，大振り等の技を身に付ける。マット運動ではハンドスプリング，バク転，前方宙返り等をマスターする。

また，冬には週に1度向ヶ丘遊園地のスケートリンクに行き，スピードスケートを練習する。そこで「大和スピードスケートクラブ」にスカウトされ入部する。

小学校6年生になるとき，新設小学校が完成し強制的に転校させられる。

いろいろなスポーツを体験してきたが，やはり野球が他とは比較にならないほど楽しいものであった。新設の小学校で新たにチームを作り，狛江市の少年野球大会で準優勝をする。

また，近所に日本ビール（サッポロビール）の社会人野球チームのグラウンドがあり，外野の球拾いをさせてもらった。一流選手達の動きを目の前で見ることができたことは非常に大きな意味があったのだと思う。

主な怪我や出来事：

小学校3年時，投手をしていたとき打球を右手小指

で突く。（今も曲がったまま）

小学校6年時に不注意から悪送球に気が付かず，振り向きざまに送球を右目に受け，失明寸前になる。（病院に行かず，二日程放置していたため）

3. 《中学校時代》思春期中期・後期

荒れた中学校生活であった。喫煙，バイクの無免許運転，シンナー遊び，万引き，授業妨害等が頻繁に起こっていた。当然野球部に所属していたが，上級生からの理不尽なしごき，いじめが毎日のように繰り返されていた。野球への情熱が薄れかけた事もあったが，近所に住んでいた大学生が，毎晩のように素振りを見てくれていた。そのおかげで非行に走ることなく，ますます野球にのめり込んでいくようになった。

主な遊び：野球観戦（東京六大学・東都大学・社会人野球）神宮球場や後樂園球場に出向き，洗練された選手達を目に焼き付けていった。

スポーツ，他文化：野球以外のスポーツにまったく興味なし。

4. 《高等学校時代》

野球強豪校を受験するも失敗。野球ではあまり知られていない日本学園高等学校に入学する。受験に失敗したことにより野球を続けるつもりはなかったが脚は野球場へと向かっていた。案の定，同好会のような野球部で入部と同時にすぐに遊撃手としてレギュラー選手となるが，大会ではいつも1，2回戦負けであった。しかし，高校2年生のときに事件が起きた。熱血体育教師が赴任してきたのであった。先生は大学で4年間しっかりと野球の実践を行ってきた，正真正銘の専門家である。野球部は一変し，その野球に対する厳しい姿勢について行けず，多くの部員が退部していった。この先生との出会いにより，消えかけていた野球への熱い思いに再び火がついた。「高校野球とは何か？」を叩き込まれたのだ。

スポーツ，他文化：野球戦術，戦略，取り組む姿勢を教わる。「野球はあらゆることにあてはまる」こと，野球と学問に対する姿勢について厳しく，そしてわかりやすく指導を受ける。オーケストラ演奏の鑑賞（野球のチームに置き換えて考えさせる）を見せられた。

主な怪我や出来事：膝蓋骨亀裂骨折（捕手と激突）病院にてギプスで固定されたが翌日監督にはずされる。

高校2年時に日本体育大学進学を決め、そのための勉強に励む。

Ⅲ. 教員・指導者として

1. 《幼児体育教員・日本学園高等学校》

日本体育大学卒業後、海外青年協力隊の隊員として中南米にあるコスタリカに少年野球指導員として2年間派遣されることになっていたが、最後の健康診断で問題があり断念する。結果的に幼児体育指導員として働くこととなった。

幼児体育指導は卒業したての小生にとって貴重な経験であった。幼児は小学生と違って、面白くなくては集合しないし、危険に対する判断が乏しいため片時も気を抜くことができない。1, 2段程度の跳び箱の上に乗って飛び降りる遊びをしていた時のこと、頭から飛び込もうとする子がいたりもした。とにかく始まりから終わりまで緊張の連続であった。午後からはボランティアで母校の野球指導を手伝い、翌年より事務職員兼野球部監督となる。昭和56年西東京大会において強豪校を次々と破り決勝戦まで進出したが、後一歩及ばず甲子園出場を逃した。

翌年春には東西合わせた大会で準優勝し関東大会に進出した。大学出たての指導方法は徹底したスパルタ指導で、そのことについて何も罪悪感を持たず無我夢中で取り組んでいた。飛びぬけた選手がいない中で、どのようにチームを勝たすことができるのか。自分の指導方法にも疑問を持ち始める。

監督就任から5年が経ち、やはり教員として野球監督をしなければ限界があると思い退職を決意する。

2. 《北海高等学校教員。コーチ・監督》

昭和60年4月より北海高等学校保健体育教諭、野球部コーチとして赴任する。3月中旬に北海道に引越しを行うが、あまりの雪の多さ、寒さに環境の激変を肌で感じる。1年半ほど野球部コーチとして選手たちと接する。

主に試合に出られない選手たちを担当したが、日本学園では見たことのないような好選手が試合メンバーに入っておらず、選手の層の厚さに驚かされる。61年秋の新人戦より監督として指揮を執ることになったが、札幌支部予選一回戦で敗退する。OBや北海ファンから罵声やピンを投げつけられ、麻生球場から出られなくなった。子供達の悔しそうにスタンドを睨みつける目を見て一層ファイトが沸きあがっていった。その結果、春の選抜甲子園2回、夏の甲子園4回の計6回出場することができた。

しかし、甲子園に出場したものの、3回、4回と回を重ねるごとに何か違和感を覚える。甲子園に出場するこ

ととはどのような意味を持つのか？体育教員としてどのようにグラウンドに立てばよいものなのか？高校野球を通して、教育の実践をするにはどうすればいいのか。

自分自身の行っていることに納得できなくなり、平成10年40歳で高校野球界から身を引くことを決意する。

主な体育指導：陸上・バレー・バスケット・バドミントン・卓球・器械体操

3. 《日本体育大学野球部監督・非常勤講師》

平成10年3月、日本体育大学の監督に就任する。部員の顔と名前が一致しないままアリゾナ州スコッツデールにて春季キャンプを行う。選手たちの多少の戸惑いはあったものの、打ち解けるまでに時間はかからなかった。高校野球を続けている間は経験できなかった海外キャンプ。メジャー、3Aクラスの練習をじかに見て、野球とベースボールの違いを肌で感じる。

帰国後、二週間ほどで春季リーグ戦に入り2位に終わる。野球部員は400名ほど在籍しており、いかに公平にチームをまとめてリーグ戦に入るかを考えた。秋のリーグ戦は二軍の中から這い上がってきてレギュラーを手にした者もいた。全チームから勝ち点を上げ完全優勝を成し遂げ、神宮大会に出場。

二軍から這い上がってきた選手がベストナイン・首位打者を手にした。選手たちに公平にチャンスを与える重要性を感じるリーグ戦であった。

主な体育指導：ソフトボール

4. 《浅井学園大学・北翔大学》

平成14年より浅井学園大学野球部監督に就任。就任当時野球部というには程遠く、野球同好会であった。大学野球部は学生野球憲章に基づき運営されなければならない。本学の場合将来指導者を目指す学生も多く、いかに組織立った練習を学生時代に実践することができるかが重要なのだ。

正しい学生野球のあり方を理解させるために、何度もミーティングを重ねた。「楽しく野球がしたいから、組織立った野球はしたくない」などという学生もいた。学生野球連盟に所属し、大学名を胸に入れてリーグ戦に出場する意味を理解していない。「楽しさからしか、喜びを見出せない」のである。

それとは逆に「統制のとれた組織立った野球がしたかった」という選手もいた。その選手が後にリーグ戦で首位打者、ベストナイン、年間首位打者のタイトルを獲得した。当然のような気がするのである。

平成17年秋・18年春に優勝して大学選手権に初出場し

た。大学選手権ではその大会で優勝した大阪体育大学に2対1で敗れはしたが、野球部にとっては大きな財産となった。

野球とベースボール、学生野球のあり方とはどうあるべきなのか。勝つことはスポーツにとって重要なことであるが、指導者としては結果だけでなく過程を大切にしたいと考えている。学生野球なのだから。

Ⅳ. 先達のスポーツ指導教育

陸上競技の織田幹雄氏はコーチング課題の中で、「1924年、オリンピック百メートル優勝者アブラハムスは陸上選手に絶対に禁酒、禁煙すべきだとは言わない。悪いものは自ら避けた方が良くも思っているが、私はこの態度で選手に臨みたいと思う。選手生活を続ける以上、自らが悪いと思うものを避けるという自覚のほうが大事だと思う」と述べ、スポーツの指導においては何よりも選手自身の自覚を求めている¹⁾。

北海道女子短期大学で教鞭をとられた南部忠平氏は「スポーツは人生のすべてではないが、スポーツによって人生は素晴らしいものになる。自分の人生を素晴らしいものにしたいと願うのは誰しも同じことであるが、それは自らの創造と努力とで築き上げていくものである。私はその力をスポーツを通して養ってきた」とある²⁾。

片倉氏は織田氏、南部氏の思い出を以下のように記している。

「勤務校の体育大会の会場がなくて困っており、大学側の御好意で懐かしいグラウンドを借用させていただき、無事大会を実施することができました。おかげで、3年に一度は整備の整ったグラウンドを生徒たちに経験させたいというささやかな願いがかなえられたのです。10年ぶりに立つグラウンドは、みごとなグリーンにアンツーカーの調和が美しいこと。私の記憶にあるグラウンドは、あまりパツとした天気ではなかった。むしろ江別特有の風の強い肌寒いグラウンド開きのこと、佐々木吉蔵先生の合図で、南部忠平、織田幹雄両先生が100メートルをジョギングされた日のことでした。お2人並んで美しいフォームに私達学生が拍手で迎えたあのグラウンドの誕生の日のこと。また、厚い雲から時折日は差してくるものの、やはり風の強い肌寒い女子陸上記録会の日のこと。私は陸上部には席を置いていなかったが、この新しいグラウンドに他校の人たちが来て活気づくことは、私達体育科の学生にはうれしいことであり、仲間を大いに声援したものでした。板で囲んだ土手に腰をかけ、こんな恵まれたグラウンドがあるという誇りを持って」³⁾。

また、野球の前田祐吉氏は野球の適性の中で「私は野球という競技の特徴を次の二点に集約して大過ないと考

えている。即ち、1、野球は人間の様々の運動能力の、そして非常に広範囲の能力を駆使してプレーされる競技であること。2、個々のプレーに高度の熟練を要し、同時に複雑なチームプレーが要求されること。以上二点である。従って野球選手の適性も原則的には右の二点に合致することが必要となる訳で、1、からは肉体的な適性が、2、からは精神面の適性が大よそ見当が付くと思われる」⁴⁾と述べている。さらに精神面について以下のように続けている。「野球競技が高度の熟練を要するという意味から練習熱心であること、更に言えば野球が好きでたまらないということも大切な適切であろう。自ら工夫をこらし、自ら努力する選手でなければ大成は望むべくもないのである。また、複雑なチームプレーを全うするためには同僚との協調性がなければならず、プレー・フォア・ザ・チームの精神に徹しなければならない。しかも様々なチームプレーは各選手がそれぞれ全力をあげてプレーした場合のコンビネーションでなければならず、この意味からも練習であれ、試合であれ、常にチームのために全力を尽くして飽かぬ熱意と根気が不可欠の要素となる訳である」²⁾と述べ、精神力の大切さをあげている。

Ⅴ. スポーツ教育論

運動、スポーツ史に書いたように、幼い頃より活発に動き回る子供であったと思う。遊びを求めて朝から晩まで野山を動き回っていたことが断片的に鮮やかに思い出される。

このような遊び、遊戯に関して、多くの学説が出されており、主要なものとして以下のものがあげられている⁵⁾。

(1) 勢力過剰説 (2) 生活準備説 (3) 反復説 (4) 本能説 (5) 休養説 (6) 平衡説 (7) 補償説 (8) 自己表現説。勢力過剰説は人間の過剰なエネルギーは遊戯によって発散され調節されるとする学説とされ、生活準備説は将来の生活の準備行動として、子どもの時期に遊戯が行われると考える学説であるとされているが、いずれも無理なく、自然に考えられる学説であり、その他も大いに容易に理解されるものである。

また、遊戯の教育的効果について、身体的効果、知的効果、感情的効果、社会的効果等、多くの視点より考えられており、いわば社会の構成員として生活していく為の準備期と考えられよう。

学齢期から始まるスポーツは教育と結びついていよう。以下は教員、指導者として活動したときの私の感動の体験を通して、スポーツ活動は即ち教育活動であるということ振り返ってみたい。

1. 日本学園高等学校時代

勤務当初、部員が少ない状況であり、指導者としてのスタートにあたり、先ず用具を整え、環境づくりから始めた。大学卒業直後であり、指導は厳しいものであった。さしあたりの目標は秋の新人戦であり、勇躍参加したが一回戦から強豪校の一つである桜美林高校に15対0、3回コールドゲーム負けであった。(当時は3回15点差でコールドゲーム) さすがに衝撃を受けたが、挫けることなく、その後も冬季の猛練習に励み徹底的に守備を鍛えた。夏の大会では西東京の決勝戦まで進んだ。そのときの対戦相手は国学院久我山高校であった。実力の差は認めざるを得なかったが、「やればできる」という感触を実感した。選手の中学時代の所属クラブは卓球部、サッカー部のゴールキーパー、バレーボール等であり、練習しただけでは伸びるという信念も芽生えた。卒業後、生徒に「よく頑張った最後までついてきたな」と質問すると、「野球部を辞めたいなどと恐ろしくて誰も言い出せなかった」と言う答えが返ってきた。

2. 北海高校時代

昭和60年4月より北海高等学校に勤務し、平成10年まで続けた。赴任当初1年半は保健体育教諭兼野球部コーチを務め、その後監督に就任し、その間幸いにも北海道代表として甲子園に数回駒を進めた。北海高校では既述のようにチームワークを基本とした指導をするように心がけた。

平成6年の夏の大会でも甲子園に駒を進め、ベスト8まで進むことが出来たが、秋の若シャチ国体(愛知県開催)で幸いにも優勝することができた。この頃の指導法は部員が各部門のコーチ役を勤め、部員全員が一体となって運営する方法であった。グラウンドを管理するマネージャー、練習の進行を管理するコーチ、各ポジション別のコーチ、各部門がそれぞれの責任をしっかりと果たすことによってチーム全体で戦っているという実感を得ていた。野球の勝敗を左右するのはやはり投手力ではあるが、それを支える他の要因が一線に並び、協調し合って好成績を収めたと思う。全員一丸となるスポーツは正に教育の力であると思うしだいである。

尚、マネージャー、コーチの役割は生徒同士が自主的に

決定したものであり、生徒自身の意思である。この役目を担うことは主将以上に権限があり、責任も重大である。このよりよい自主的な行動力こそ教育の力であり、自らはぐくんだものであり、スポーツの持つ教育力であると考えている。

3. 北翔大学に於いて

平成13年以来、北翔大学に勤務し、職員さらに教員を務めながら野球部監督の務めを果たしている。一般的に学生時代は野球に専念できる学齢期の最後の4年間であり、集大成の時期であり、同時に人格完成の時期、人間完成の時期であり、そのことを忘れないよう指導に努めている次第である。従って団体競技としてのコーチ等の役割は学生自身が積極的に進め、それ故に良い成績を取った時の喜びも学生自身の達成感も大きいと考えられる。スポーツの有する大きな教育力も実り豊かなものになると考えられよう。教育は人間の行動を望ましい方向に統御する過程であり、スポーツの持つ多くの要因で自主的に函養されるものであると思う次第である。

付 記

本研究は「平成22年度北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センターの研究費」の助成を受けて実施されたものである。

文 献

- 1) 織田幹雄：コーチングの課題. 体育の科学 1(4) : 186-189, 1951.
- 2) 川嶋唐男：南部忠平物語. ざっくばらん・スポーツ人生. p.15, 北海道新聞社, 1981.
- 3) 片倉睦子：懐かしいグラウンドで. 浅井学園創立40周年記念誌. p.87, 1979.
- 4) 前田祐吉：野球. 学校体育, 16(11) : 46-48, 1936.
- 5) 勝部篤美：遊戯の発達. 猪飼道夫・江橋慎四郎・飯塚鉄雄・高石昌弘編 体育科学事典 第一法規, 東京, pp.233-234, 1970.

